

編集後記



創立20周年記念特別号編集委員長
西岡伸紀

本誌は、20周年を迎えた連合大学院のこれまでを振り返り今後を展望するものとなりました。執筆された先生方、投稿された院生や修了生の皆さん、発刊までの実務を担当された連合大学院事務室の職員の方々に心よりお礼申し上げます。

本誌では、まず研究科長から、連合大学院の成立発展の過程や現況をご報告いただきました。ご報告内容のみならず、示された統計情報は従来蓄積された貴重なものであり、振り返りと将来展望の手がかりとなります。

学長からは、教育実践学論集の教育実践学に対する貢献、論集の充実発展のための投稿者の拡大や審査の質の確保、さらには、国際誌への発表を含む研究論文の質の向上の必要をご提案いただきました。日本の教育実践学研究が国際的な視座から論じられることは大きな楽しみでもあります。

「教育実践学の歩みと展望」では、各講座の先生方から、教育実践学の充実・発展に向けた考えや取組が、講座や分野の特徴を反映して論じられています。教育実践学研究の成果は多岐にわたり、教育実践学論集、博士論文、連合大学院共同研究プロジェクト、学外との共同研究など様々に見出せることに気付かされます。さらに、教員資格審査、院生の研究領域、就職状況、院生の国際学会やインターンシッププログラムへの参加に対する支援など、教育実践学の充実・発展に関わり論じられています。

「私（たち）の研究」では、修了生や院生から8研究（学校教育方法、学校教育臨床、先端課題実践開発、自然系教育、生活健康系教育）が紹介されています。ここにおいても、教育実践学研究の多様なテーマやアプローチが示されています。また、困難を克服して学位を取得された過程、国際インターンシッププログラムの貴重な参加経験や成果などは、後に続く院生にとってモデルとなるものと思います。

ところで、連合大学院の教育・運営に携わり、連合大学院として明確な目標や方針をもつことの重要性を実感します。連合大学院は、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシーなどを定め、育成する能力として教育実践学コンピテンシーを示しています。大学院生の多様な教育実践学研究を前に、連合大学院での教育の在り方に戸惑うことも稀ではありませんが、そのような時に方針やコンピテンシーを確かめると、原点に戻れたような気がします。それらは将来変わるものかもしれませんが、今後も拠り所として、教育実践学研究の方向を示したり支えたりするものと期待しています。連合大学院、教育実践学研究のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。